

各地で話題の病虫害

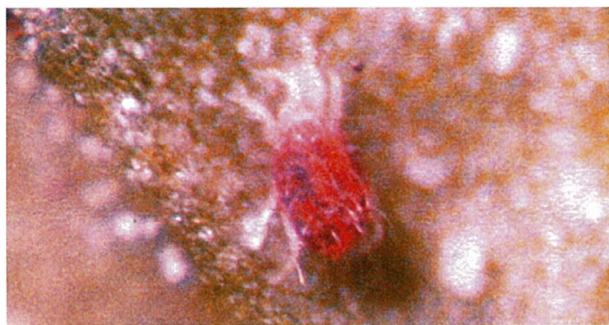
ナンセイハダニ(新称)

学名：*Tetranychus neocaledonicus* ANDRÉ
英名：vegetable mite、vegetable spider mite

2001年1月鹿児島県奄美大島のパッションフルーツのハウス栽培園において、葉に赤色のハダニが多数付着しているのが確認された。鳥取大学名誉教授江原昭三氏による同定の結果、国内未記録のナンセイハダニ(新称)であることが判明した。

本種は熱帯及び亜熱帯地方を中心に広範囲に分布し、また、寄主植物も多いことから、農業上重要なダニの一種である。

雌成虫は、体長約0.5mm、体色は深紅色で後



鹿児島県農業試験場 山口卓宏氏提供

体側部に暗色紋を持ち、カンザワハダニ及びナミダニに近似している。雄成虫は、体長約0.4mm、体色は赤又は黄褐色である。産卵直後の卵は透明であるが、次第に淡橙色に変わる。

本種は主に葉裏に生息する。生息場所には糸(網)が形成され、卵はこの糸に産み付けられる。雌1頭当たりの総産卵数は200卵以上の場合もある。また、年間世代数は最適条件下で32世代という報告もある。

今までに、野菜、果樹、特用作物、草本、花き及び庭木など400種以上の植物でその寄生が認められ、加害部は白く、かすり状を呈する。

現在、本種に対する登録農薬がないため、発生地からの採穂や苗木の移動は避け、発生した場合、その茎葉や株を除去することが重要である。また、一般にハダニ類は乾燥で発生が助長されるため、施設内が過乾燥にならないように管理する必要がある。

バラ疫病

学名：*Phytophthora megasperma* Drechsler

2000年7月、宮城県内のバラ養液栽培施設において、定植2～3週間後の葉が黄化し、また、枝の一部が枯れるといった症状が発生した。その後、同一ベット内で同様の症状が広がり、中には落葉するものも認められた。千葉県暖地園芸試験場による同定の結果、*Phytophthora megasperma* によるバラ疫病であることが確認された。

日本における本病の発生は、1968年に千葉県において初確認され、その後静岡県や愛知県等



においても確認された。

症状は、初め地際の枝に暗緑色で水浸状の病斑が現れ、暗褐色となり、やがて株全体に病徴が広がる。特に未熟枝では急速に拡大し、新梢はしおれて枝枯れ症状を呈し、枯死する。成熟枝では下葉から徐々に黄変、落葉する。また、枝は地際から褐変し枯死する。

本病原菌は糸状菌の一種で、土壌伝染や水媒伝染する。また、被害株は組織中で越冬し、翌年の伝染源となる。

本病を診断する場合は、新鮮な発病部位を水中に入れ室温で、1～2日置くと図示するような遊走子のうが形成されるので、これを観察することにより行う。

本病の防除としては、排水を的確に処理することが最も重要である。ロックウールや培地等の資材の再利用はなるべく避け、利用する場合には消毒を行い、また、無病苗を定植することが有効である。